岡山県立博物館だより

12号
3月20日
1979

「研究報告」創刊について

館長　富岡敬之

わが岡山県立博物館では、昭和53年10月31日付をもって「研究報告」を創刊した。

＜吉備文化の伝統をうけつぐわが岡山県立博物館は、岡山県の歴史と文化の解明に関係ある貴重な資料を、広く収集、保管、展示するとともに、それらの調査研究を使命としております。昭和46年8月開館以来、職員は一体となってこのことに努力してまいりました。そして、それらの成果は特別展示などの企画展及び企画展図録、あるいは随時発行する館報等にその概要を紹介してきました。

このたび、さらにそのことを強化充実し、より深く、よりまとまったものを見ていただくために、岡山県立博物館「研究報告」を創刊いたしました。もとより、内容のつたなさ、未熟さは十分に自覚しておりますが、これを一つの里程標として、なおいっそう研究調査の徹底と深化を期する覚悟でおります。（以下略）＞

以上の創刊のことばに、われわれの微意と念願がこめられている。あらゆる分野の専門家各位のご批判とご示教をお願いしたゆえんである。

第1号には、臼井洋輔「甲冑における鉄小札の配列についての一考察」（学芸課学芸員）、竹林栄一「古川古松軒一日記・雑記」（学芸課主任）富岡敬之「森田思軒関係書簡」と、主として館蔵資料による研究と紹介を収録した。

新刊の「博物館学講座 第5巻」（雄山閣出版）において千地万造氏は＜博物館における学術研究の特質＞について述べ、博物館的な研究と大学的な研究を別表のように整理している。

〔別　表〕

大学的な研究	博物館的な研究
仮説の発見	仮説から法則へ
新しい方法の開拓	法則の技術化、体系化
帰納的	演繹的
質的	量的
データの蓄積	一次資料の蓄積
細分化	総合的

いまさら博物館法を持ち出すまでもなく、博物館資料に関する専門的な調査研究は博物館の基本的な機能であるとされている。このことは基礎的な学術研究を踏まえた上での広範な博物館活動の展開を示唆するものであって、ただ単に収集資料の専門的調査研究に止まることを意味するものではあるまい。なぜなれば、よき博物館資料（一次資料）を選択する目は、学芸員の学識・経験に負う所が大きいからである。

前掲書においては、学術研究を大別して博物館的研究と大学的研究の2つに類型化してとらえ、それぞれの機関の目的・機能からみて、おのずから分担範囲がきまってくるとしている。その要約が別表であったが、博物館としての特質は、いかなる研究であれ、その結果が最終的には博物館資料（原則として収集物件）の集積に結びつくことが必要であるとされている。

しかし以上に紹介した研究の2類型は、いうなれば博物館の特質・機能を活用せんがための一つの考え方の問題なのであって、本質的にいって学術研究はもともとこの両面が一体化しているものであろう。

この所説に対する検討はさておき、本館の「研究報告1」が、期せずして博物館的研究を指向するものとなったことは、発表者の日常的研究調査活動が、博物館学芸員としての自覚に根ざすものであったことを如実に示したものであろう。

特別展

「岡山の民俗芸能」ーその形と意匠ー

53.11.1～12.3

総　　論

岡山県内には数多くの民俗芸能が伝えられており、夫々独特の姿を形成している。それは各地域の自然の中で生活する人々の、日常の営みの中で生み出され、育てられたもので、現在私たちが目にする民俗芸能の中には夫々各地域の民衆の長い歴史が集約されている。民俗芸能をとりあげ、その成り立ち、変遷を考え、各地の芸能を比較してみることは夫々の地域の歴史を考える上に、あるいは郷土岡山を見なおすために欠くことのできないことであろう。このような意味で、昭和53年度は岡山の民俗芸能をとりあげることにした。ただ、その性格上、博物館の展示になじまないものもあつて、展示はその芸能を象徴する形・意匠を中心とするものにならざるを得なかつた。具体的には岡山の面と頭・祭り・備中神楽・芝居の4つのテーマで展示することにした。

なお、期間中の11月12日（日）には、文化庁・高橋秀雄氏の「祭りと芸能」、東京国立文化財研究所・三隅治雄氏の「民俗芸能の系譜と分布」と題する記念講演会を開催、この日は午後から後楽園能舞台で郷土芸能観賞会もおこなわれ、盛況であつた。　（竹林栄一）

岡山の面と頭

仮面は変貌の道具である。それによって人は神にも悪魔にもなれる。美しく装うこともできる。おそらく、外見のみならず本質までも変えてしまいたいという欲望さえ叶えてくれるだろう。仮面には霊（アニマ）を吹き込む威力がある。こうした面に魅せられて、わが国では古代から実にさまざまな仮面が製作されてきた。岡山県においても、美作地方の社寺を中心に、信仰あるいは芸能行事に用いられた多彩な面が伝わっている。古面はそれ自体の美しさ、力強さなど美術的な価値はもちろんだが、当時の宗教・芸能などを理解するうえで格好の資料でもある。

この特別展では、岡山県内の面に限定し、県指定重要文化財8件を一堂に集めるとともに、たとえ稚拙ではあってもローカル色豊かな土俗的なものの紹介に努めてみた。鎌倉から江戸期までの作約40点を、舞楽面・行道面・追儺（ついな）面・獅子頭・鼻高面・神楽面に分類・展示したわけだが、殊に本来、魔除け、雨乞い用であった宗教的な仮面までも、時代が下がるにつれて誇張が加わり、装飾化されて娯楽的な面にかわっていく過程などは注目に価しよう。なお、今回殆んど所在を明らかにし得なかった県南の面についてはなお研究の余地がのこっている。　（守安　収）

祭　　り

日本の祭りは神に五穀豊穣を祈り、感謝するという農耕に対する私たちの祖先の素朴な祈り、要求に根ざして成立したと考えられる。春には、その年の農耕開始にあたって、豊作を祈願し、あるいは豊凶を占い、収穫の時期には、実り豊かであったことを神に感謝し、神と共に収穫物を食して喜びを分ち合う。私たちの祖先の農耕生活は神と共にあった。祭りのコーナーでは、このような農耕生活をめぐる年間の神事を中心に展示を構成した。

記念講演会風景

県内には、田植の頃、お田植祭と称して、その年の豊凶を占う例が見られる。富村布施神社のお田植祭、吉備津彦神社の御田植祭などは古い様式を残していて興味深い。夏には各地に、疫病退散を目的とした祇園信仰が見られるが、岡山市阿津に伝わるお船引き、岡山市沖田神社の祇園丸など特色ある行事である。収穫時の祭りは年間の神事のうちでももっとも盛大におこなわれるのが通例である。吉川八幡宮その他に見られる神迎えの場、ハツケ、志呂神社の神餐、御供、備中町鋤崎八幡宮の宮座、七肩半の相撲、阿波村八幡神社の神幸の花、備中地方にみられる供奉楽、渡り拍子などは秋祭りの意味を考える上で重要な意味を持つと思われる。　（竹林栄一）

備　中　神　楽

ひとくちに備中神楽といつても、それに使う神楽面にも、演ずる神楽の内容にもかなり著しい地域性がうかがえる。西林国橋以後主流を占めた成羽一帯の面は、洗練され、画

一化された表情であるのに対し、備中北部や美作の一部に存在する備北型の面は小型で、土俗的素朴さをもっている。紙製の面もある。また、内容からみると神事部分では備北型も神代神楽と共通であるが、神能の部分が異質のものであったり、欠落したりしている。そのかわり、一切の神事のあとに後能が加わるという形をとっている。このように備中神楽＝神代神楽と考えられがちであるが、神代神楽と形態を異にする備北型の神楽の存在を無視できない。これは神代神楽以前の形態を知る上で貴重である。

備中神楽は、近年の伝統芸能復興活動の中で、非常に盛んになつてきた。神楽太夫の数も昭和43年から10年間で約5倍（300人）に増えてきた。しかし、問題なのは改革後の内容が神代神楽に統一され、備中神楽＝神代神楽として固定化される傾向である。

現状では、国橋以前の古い型をとどめているのではないかと思われる素朴な神楽が、急速に姿を消すのではなかろうか。備北型も周辺部ほど面の種類も多く、すでに社中の人でも用途不明の面さえある。そのような所へは、他社の者は手伝いにくく、孤立化が進み、絶えてゆく恐れがある。また神楽面を調査する場合、絶えた社中などの面をごっそり譲り受けて、所在を遠くに移し、引きつがれいる例が何カ所か判明した。また京作りのものも混じっていた。この点、面の地域性を考える場合注意が必要であると思われる。（臼井洋輔、柴田　一）

芝　　居

芝居は歌舞伎と・人形芝居と面芝居に大別される。

農村でおこなう歌舞伎は地下芝居、地芝居、地狂言とも言われる。地とは土地の者とか土着の意である。美作地方では文化文政期には既に常設舞台がつくられ、美作東部の出雲街道沿いでは96カ所の農村歌舞伎舞台が確認され、多くは幕末から明治にかけて建てられ、農村歌舞伎の盛行を窺わせる。これは播州の高室芝居等の影響と考えられる。

人形芝居には人形浄瑠璃芝居や、糸あやつり人形芝居及びデコ廻しの3種類がある。美作地方では人形劇団として、美作町の「錦座」（明治初年）鏡野町の「住吉座」（昭和5年）等が活躍していた。

面芝居は奈義町の高森嘉一氏と邑久町の太田稔氏が伝承しており、前者は素朴な座敷芸で、少人数を対象に行なわれ、後者は面浄瑠璃芝居と呼び、ケレン味たっぷりな小屋芸で多人数を対象に劇場等で行なわれている。

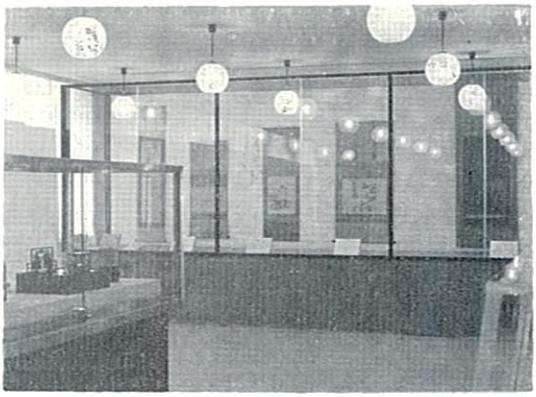
これらの芝居はいずれも浄瑠璃の義太夫節と共に保存継承されてきた。美作の芝居、備中の神代神楽、備前岡山の常設劇場が、時を同じくして、明治初期から中期にかけて繁栄しており、本県芸能史上興味深いものがある。（浅原　健）

巡　回　展

高梁久世会場の巡回展をおえて

高梁会場　53.11.18～11.21
久世会場　53.11.23～11.26

巡回展は「開かれた博物館」を目指す本館の普及事業の一環として、日ごろ疎遠となりがちな地域の県民の皆さんに、館蔵の考古・歴史・民俗・美術工芸等の資料を鑑賞していただこうという試みである。昨年の津山展にひきつづき、本年度は高梁市立図書館、久世町中央公民館の2会場で実施した。展示品目や点数、期間等については資料管理



巡回展久世会場風景

の面から様々な制約があり、「岡山県の歴史と美」というテーマを十分消化しきれぬ恨みがのこるが、実物資料を原則とし、開催地の関係資料もまじえて、展示物を精選した。地元教育委員会の熱意もあり、夜間まで開館時間を延長したが、熱心な鑑賞者ばかりで主催者としては感謝あるのみである。なお展示内容は次の通り。但し、両会場で資料の一部変更がある。（守安　収）

考古1	ナウマン象化石（上顎部）		1点	洪積世
〃 2	三角縁四神四獣鏡（陳是作竟）		1面	三国時代
〃 3	内行花文鏡	（備前市丸山古墳出土）	1面	古墳時代
美術4	紙本淡彩　図像抄		1巻	鎌倉末期
〃 5	紙本著色　法然上人伝法絵断簡	＜大谷の尼＞	1幅	〃
〃 6	紙本著色　一遍聖絵＜福岡庄＞	複製	1巻	原本12-9年
〃 7	○絹本著色　宇喜多能家像	（九峰宗成賛）	1幅	大永四年（1524）
〃 8	紙本墨画　山林清閑図	（浦上玉堂筆）	1幅	江戸後期
〃 9	紙本淡彩　唐人物図	（柴田義董筆）	2曲屏風	江戸後期
〃 10	木版画　岸田吟香売薬錦絵		4枚	明治初期
工芸11	○太刀　銘　正恒		1口	平安末期
〃 12	刀　銘　祐包		1口	江戸後期
〃 13	紫絲威腹巻		1領	室町時代
〃 14	海揚り備前焼	（水の子岩海底出土）	6点	〃
〃 15	草花蒔絵螺鈿櫃		1合	江戸初期
〃 16	盤　香　具		1面	江戸後期
〃 17	正阿弥勝義金工品		3点	明治初期
書 18	木版　寂室語録		4巻	南北朝
〃 19	紙本墨書　小堀遠州書状	（池田光政宛）	1幅	江戸初期
〃 20	〃　良寛七言絶句		1幅	江戸後期
歴 21	蘭学資料		1括	江戸後期

○印は県指定重要文化財

テーマ展

正阿弥勝義展に想う

53.8.15～9.17

明治の生んだわが国の代表的彫金家、正阿弥勝義の金工品と関係資料を展示公開し、時代的背景とその作品の特色を明らかにするとともに、その保存顕彰につとめた。

正阿弥勝義は天保3年（1832）3月、松平家お抱えの彫金師中川勝継の三男として津山二階町に生れた。幼名は淳蔵という。10歳の時コレラで母、祖母、長兄を次々と失ない、生活の苦しさは並のものではなかつたようである。嘉永2年、岡山浜田町の正阿弥家を18歳で嗣ぎ、池田家のお抱えとなる。江戸にいる次兄中川一匠の指導によって間接的に当時の第一級の彫金家後藤一乗の作風を吸収しながら、独学自習した。何度か江戸修業を申し出たが、容れられず、結局「一乗も人なり、勝義も亦人なり。精神一貫以つて斯道を窮めん……」と言い、くやしさの中に独自の道を歩むことを決心する。初期の作品は刀装具が中心になっており、天性の素質を十分に発揮した、花鳥虫類中心の写生風の図案を得意とした。しかし、明治9年の廃刀令以後刀装具の需要がなくなると、多くの職人はその業を失なったが、彼は銀地に鉄象眼をするなど彫金法に独自の工法を加えながら、茶器、香炉、置物などの美術工芸品を次々と世に示した。作品の素材は、金、銀、銅、鉄とその変り金を使い、精緻な技法による高彫色絵を考案して、明治の近代機械文明の波に人間技の極致でもって抗しようとしたようである。勝義は家督を長男に譲り、一層の研鑽のため、66歳で京都に出た。没するまでの11年間は勝義の完成期でもある。勝義の作品の特色は、精緻な写実と、各種の金属素材を巧みに用い、またそれらの合金及び処理に変りがねによって出された、独特の色沢を活かした色絵金工と、鉄錆他の寂びた味を最高度に活かした美しさ、及びこれらに独特の象眼技術を活かした金工に代表されている。

紙銀地葡萄鉄象眼花瓶

出品目録

1．東山曙之意花瓶
2．笹に蜘蛛帯留
3．短　冊
4．紫がく銀匙
5．丹頂居鶴香炉
6．萍蓬虫灰皿
7．銀網杓子
8．糸瓜掛花瓶
9．蜻蛉香炉
10．素銅瓢箪テントウ虫花瓶
11．鐔
12．短刀合口銀拵
13．素銅霊芝文鎮
14．純銀地葡萄鉄象眼花瓶
15．鯱香炉
16．麟鳳亀龍香炉
17．朧銀雲龍香炉
18．透彫鐔
19．時鳥の図小柄櫃
20．寒山拾得香合(小)
21．小菊重彫菓子器
22．指　輪
23．ネクタイピン
24．勝義銘鏨
25．寒山丸形香合
26．漢代古瓦形風鎮
27．刀装具下絵
28．松竹梅香炉
29．難波潟和歌之意菓子器
30．雛巣釣香炉
31．鶏香炉
32．刀装具下絵
33．写生帳
34．漢古瓦式香炉
35．刀装具
36．受賞メダル類（国内）
37．　〃　（外国）
38．勝義愛用杯
39．三所物
40．小柄櫃
41．芦に千鳥文鐔
42．勝義書状
43．淳蔵借用証文
44．勝義肖像写真
45．年　表

（浅原　健、臼井洋輔）

テーマ展

豊原庄と弘法寺展について

54.2.14～3.11

豊原庄は旧邑久（おく）郡の南西部にひろがる広大な庄園で、備前国の穀倉地帯である。庄園の起源は明らかでないが、鎌倉時代のはじめ、俊乗坊重源（ちょうげん）が豊原庄に豊光寺（ぶこうじ）を造立し、湯屋を作つたことや、またそのころ、後白河法皇・後鳥羽上皇の庄園であったことが知られている。また、南北朝時代の武将である児島高徳の一族や、戦国時代の武将宇喜多能家、直家も豊原庄のひとである。

この豊原庄の「御願寺」「祈祷所」として朝野の尊信をあつめたのが、現在の邑久郡牛窓町の千手山弘法寺である。寺伝によると、開基は備前国津高郡馬屋郷芳賀に生まれた奈良時代末期の名僧報恩大師という。同寺の奥院である長倉山の報恩大師供養塚から出土した菊花双鳥鏡は、平安時代のころの銅鏡で、報恩大師信仰の古さを物語つている。

弘法寺は元亨3年（1323）堂塔ことごとく焼失したが、建武2年（1335）に再興され、寺運ますます隆盛におもむき、観応元年（1350）足利尊氏は、九州で反乱を起した足利直冬を追討するため、備前国福岡に下向したとき、弘法寺に戦勝祈願をこめている。また室町・戦国時代のころ、豊原庄その他遠近の地頭・名主たちが、現世・来世の利益を願つて、読経料・燈油料・法要料として多くの田畠を弘法寺に施入している。

宇喜多秀家・小早川秀秋のころ寺領を削られたが、江戸時代の中ごろ、岡山藩主池田綱政の帰依を得て寺領も増加し、また寂然和尚（1710～1785）が現われ、戒律を厳しくして一山の気風を粛清した。しかし、明治維新の廃仏毀釈で1000年の歴史を誇る弘法寺も衰え、また昭和42年大晦日の前日火災で多くの堂塔を焼失した。現存する塔頭は遍明院・東寿院に過ぎないが、さすが真言宗の古刹、今なお五智如来像・阿陀如来像のほか多くの貴重な資料を所蔵し、往時の繁栄の跡を伝えている。

出　品　目　録

（◎印は重要文化財、○印は県指定重要文化財）

1	菊花双鳥鏡	平安時代	弘法寺蔵
2	◎弥陀二十五菩薩来迎図	鎌倉時代	遍明院蔵
3	豊原庄政所下文	鎌倉時代	弘法寺蔵
4	南無阿弥陀仏作善集（模造）	鎌倉時代	本館蔵
5	千手山弘法寺衆徒等契状	鎌倉時代	弘法寺蔵
6	○足利尊氏御教書	南北朝時代	遍明院蔵
7	弘法寺寄進田畠目録	南北朝時代	弘法寺蔵
8	◎藍革肩白腹巻	室町時代	遍明院蔵
9	阿古陀形黒漆練革筋兜	室町時代	遍明院蔵
10	◎大薙刀（盛光）	室町時代	遍明院蔵
11	宇喜多但馬守寄進状	戦国時代	弘法寺蔵
12	池田継政奉納和歌	江戸時代	弘法寺蔵
13	弘法寺衆徒等契状	江戸時代	弘法寺蔵
14	寂然和尚肖像画	江戸時代	遍明院蔵
15	寂然和尚遺墨	江戸時代	遍明院蔵
16	弘法寺境内絵図	江戸時代	岡大附属図書館蔵
17	斎藤一興奉納般若心経	江戸時代	弘法寺蔵
18	練供養行道面	江戸時代	弘法寺蔵

（柴田　一）

伝統を受けつぐ会

1.　**備中神楽面講習会**（53.6.17～9.1）

神楽面は伝統的な備中神楽（岡山県指定重要無形民俗文化財：54.2.3国指定重要無形民俗文化財に指定）に使用されてきたもので、古くから神楽太夫によって製作され、保存継承されてきた。このたび、その伝統技術の普及、継承のため、神楽面の製作技術講習会を開いた。（上記期間中週1回）講師は上田春山氏（高梁市中井町津々、備中神楽宮之内社々長）。受講生は37名を数えた。男性23名、女性14名、中には外国航路の船員さんもおり、習得技術をもとに航海中に作った面が、バンクーバーで非常に珍しがられたそうである。参加者は主として、稲田姫、須佐之男命の面を打ち、多い人は11面も作つた。最後に製作品の展示会（9.5～9.10博物館2階ロビー）を催した際には70面の力作が並び、なかなか壮観であつた。なお9月10日には講師を中心に神楽舞を後楽園前庭で演じて講習会を終了した。今回の講座は、受講生の強い要望で、期間終了後も引きつづき、月1回の講習会を自主運営している。

2.　**町並と民家をたずねる会**（継続）

第18回（53. 5.14）　「四国村：民家集落」小豆島農村歌舞伎舞台、山下家、砂糖しめ小屋、下木家等。

第19回（53. 6.11）　「三原方面」木原家、仏通寺、含暉院地蔵堂等

第20回（53.11.12）　「倉敷市酒津、玉島方面」梶谷堅一郎邸、酒津焼兜山窯、内藤治彦邸小野久彦邸

第21回（54. 3.11）　「早島、庭瀬方面」溝手家、大養家等

（臼井洋輔）

成人大学講座

博物館資料にもとづいた学習として、好評の成人大学講座を今年度は別表1の内容と期間で開催した。

学　習　内　容　　〔別表1〕

部門	テーマ	講師	開設月日
（歴史）	森田思軒	館長 富岡敬之	9／22（金）
	古墳時代の岡山（現地見学）	県文化財審議会委員 水内昌康	10／20（金）
	岡山藩の政治と社会	主任学芸員 柴田一	11／17（金）
（民俗）	宮内と宮内おどり	主任学芸員 柴田一	9／29（金）
	阿曽の鋳物	主任 竹林栄一	9／29（金）
	吹屋と弁柄（現地見学）	学芸員 臼井洋輔	10／6（金）
	祭と芸能	文化庁文化財調査官 高橋秀雄	11／12（日）
	岡山の民俗芸能	主任 竹林栄一	11／17（金）
（美術）	正阿弥勝義	学芸員 臼井洋輔	9／22（金）
	備前焼と茶器	学芸課長 浅原健	10／13（金）
	仮面について	学芸員 守安収	10／13（金）
（その他）	博物館の仕事	学芸課長 浅原健	11／24（金）

応募者数は昨年の116名を大幅に上まわり、229名を数えた（定員は同じく50名）。応募者年令構成は別表2の通りである。年令構成比からみると、やはり男性は退職後、女性は育児から解放され始める頃に、学習の条件が成熟するように思われる。

〔別表2〕

年令／性別	80代	70代	60代	50代	40代	30代	20代	年令不明	計
男	4	23	35	10	6	4	2	21	105人
女	1	3	18	30	42	15	8	7	124人

出席率もよく、非常に熱心に学習された。特に11月12日は午前に文化庁の高橋秀雄文化財調査官の講義のあと、午後は第5回岡山県郷土芸能鑑賞会とタイアップして、横仙歌舞伎、備中神楽、高田神社獅子舞、面浄瑠璃、太刀踊、宮内踊を鑑賞した。

全日程終了時に、次年度の参考とするため、反省会がもたれ、アンケートも実施したので、大まかではあるが、受講者の意識を集計してみた。

1. 講座数、日数については48%が適当であると答え、もう少し多くが44%を占めた。
2. 歴史、民俗、美術……の分類別に講義をもつたが、その組合せ、内容について、87%がよいと答え、もつと深くと答えた人が7%、もつと広くと答えた人が6%いた。
3. 講義実施曜日については金曜希望が一番多く64%で月曜は0%あとは大体均等に分布した。
4. 来年度も受講するかとの質問に対しては100%の人がすると答えた。昨年も同様の質問したが、35名が希望すると答え、実際にはそれを上まわる39名の人が応募した。その点、今年度は100%の人が希望すると答えているので、枠内に受け入れられるか問題が残る。博物館資料に即した講義のため、本館講堂以外での開講が困難で定員増が無理である。
5. 希望題目、見学場所についての希望では、「瀬戸内」文化圏にかかわるものが多かつた。
6. 実施時期については4・5月頃と9・10月頃の二極化が見られた。

（臼井洋輔）

＊＊ 新収蔵品資料の紹介 ＊＊

昭和52年度　購　入　資　料

正阿弥勝義関係資料

刀装具下絵	2巻	
鯱香炉	1点	
亀置物	1点	
難波潟和歌之意菓子器	1点	
花田植風俗屏風	6曲	1双
広瀬台山筆冨嶽真景図	2幅	
四乳八禽鏡	1点	
湯浅常山自筆詩稿	1巻	
澄月自筆詠草	1巻	
岡本豊彦自筆書簡	4通	1巻
小早川隆景起請状	1幅	
武元登々庵書幅	1幅	
平賀元義長歌書屏風	6曲	1隻
〃	6曲	1隻
河本立軒肖像画	1幅	
吉川八幡のハツケ	1組	
阿波村八幡神社の花	1組	

昭和53年度　受　贈　資　料

海場り片口鉢他	2点	岡山市	原　昭人
山手焼茶碗他	7点	瀬戸町	藤原勝彦
備前焼大甕	2点	岡山市	吉村佳峰
勝義の目貫	1対	東京都	苔口仙琇
腹巻他武具類	18点	倉敷市	赤木制二
勝義書状	1通	早島町	溝手一雄
山茶碗	1点	岡山市	川澄　勲
大工道具	283点	倉敷市	黒明密恵
生活用具	59点	東京都	高戸楚一郎
高瀬舟資料	1点	柵原町	土手栄二
〃	〃	〃	高森　修
民具	5点	岡山市	半田　勇
お田植祭資料	4点	富村	布施神社
備中神楽資料	12点	高梁市	上田春山
祇園祭資料	1点	岡山市	沖田神社
渡り拍子花笠	1点	備中町	泉　儀武
大宮踊り「シリゲ」	10点	八束村	大宮踊保存会
まえびきのこ	1点	瀬戸町	藤原勝彦

昭和53年度　重要文化財公開品目

本年度の承認、勧告出品による国指定重要文化財の品目は下記のとおりである。

1	勧告出品	絹本著色十二天像	12幅	美作町	長福寺
2	〃	絹本著色仏涅槃図	1幅	尾道市	浄土寺
3	承認出品	出雲玉作阯出土品	1括	玉湯町	玉作湯神社
4	〃	絹本著色十三図	10幀	総社市	宝福寺
5	〃	絹本著色地蔵十王図	1幅	日光寺	笠岡市
6	〃	藍葺肩白腹巻	1領	邑久町	遍明院
7	〃	色々威甲冑	1領	邑久町	豊原北島神社
8	〃	紙本著色花鳥図	1隻	御津町	妙覚寺
9	〃	絹本著色阿弥陀二十五菩薩来迎図	1幅	邑久町	遍明院

（浅原　健）

岡山県立博物館だより　No. 12

発行日　昭和54年3月20日

発行者　岡山県立博物館

館長　富岡敬之

岡山市後楽園1－5

TEL(岡山)72－1148